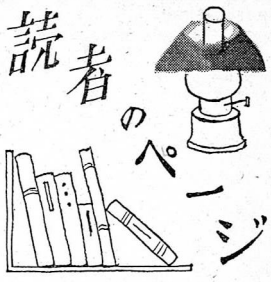

読者のためのページです。酪農関係の御質問、本誌に対する御意見、御感想等どしどし御寄せ下さい。

青草で豚を飼育したい

問　最近、草養鶏、草養豚と鶏、豚にも草を利用して、濃厚飼料費を節減し、生産コストを下げた有利な養畜経営が行なわれておりますが、豚に青草を与えた場合の利点と給与法をお知らせ下さい。

（山口県阿武郡　一読者）

答　最近、養鶏、養豚に緑餌を主体にして給与する方法は相当普及して来ておりますが、この機会に少しく詳しくご説明いたしましょう。これは濃厚飼料の節減と生産コストを引下げた経済的な、しかも生草を利用することによって健康的な養畜経営が出来るからです。

(一)　青草給与による利点

草のもつ特性は清腸消化を助け、豚の飼料経済と健康的な発育が望めるわけであり、しかも草に含まれている蛋白質は性質もよく、仔豚の成長促進とともに早期の脂肪肥満を防止します。

また　一般に仔豚が飼料をなめ始めるのは、生後二〇日以降ですが、柔らかい草は二～三週間目頃はすでに喜んで喰べますし、体の構成に直接役立ち、柔らかい繊維や酵素の働きによって食塩や蛋白質、脂肪を過剰にとった場合、その害を緩和するなどいろいろな働きをするものです。

草利用の進んでいる米国や北欧では、蛋白質に富んだルーサンミールを配合飼料に五～一〇%を必ず混ぜ効果をあげております。（わが国においても、漸次その方向に進んでおり、弊社各種配合飼料にもルーサンミールを混入している）

また、放牧養豚を行なえば、舎飼の濃厚飼料のみを与えている場合に比較して、一五～五〇%の濃厚飼料の節約代用が可能であることを報告しております。

このように蛋白質、石灰分などに富む青草で育てられた豚は成長が早く、健康で消化器管も発達しているので、肉豚にする前の一～二ヵ月間舎飼により、漸次濃厚飼料に転換して肥育を行なえば、極めて安価に良好な脂肉が得られます。欧米においては、放牧養豚を行なった後、肥育した肉豚は特別高価に取引されるほど、美味で上質な肉が得られると言っております。

(二)　豚にはどんな作物がよいか

豚はもともと消化器のしくみが、牛と異なっていて、ガサを食いこまないし、繊維を消化しないので、飼料成分とくに蛋白質含量が高く、繊維の少ないものが必要条件となります。また、養豚の立地条件からみて、広い耕地の利用は考えられないので、集約栽培に適するものでなければなりません。

これらの条件に合う作物は表の通りですが、このほか、赤クローバー、ルーサン等の繊維含量の少ない栄養価の高い若草も勿論好適いたします。

適作物と栽培基準

作物名	秋播期	春播期	播種量	播種法	畦幅	株間	堆肥	硫安	過石	塩加	混播作物
	月日	月日	キロ		センチ	センチ	一〇アール当り施肥量キログラム				
ラディノクローバー	九・上～一〇・下	三・上～四・中	〇・三～〇・五	条	六〇	一〇	一、一〇〇	四	一五	八	ライグラス、オーチャード
ケール	九・上～一〇・中	三・上～四・上	〇・二	条	六〇	一五	一、五〇〇	一〇	一五	四	秋まきにはライ麦、ライグラス
レープ	同	同	〇・二～〇・四	条	六〇	一〇	一、五〇〇	一〇	一五	四	
C・O	同	同	〇・二～〇・四	条	六〇	一〇	一、五〇〇	一〇	一五	四	
タンパラ	九・上～一〇・上	三・下～四・上	〇・二～〇・四	条	六〇	一〇	一、〇〇〇	一五	一五	六	
かぶ			〇・四～〇・六		三〇	三〇	一、〇〇〇	一〇	一五	四	
ポンキン	—	三・下～四・中									

(三)　青草の給与量

徐々に馴らして行くことが大切ですが、妊豚には石灰、燐酸、カロチンの給源として一日二～三キログラム、育成中の仔豚には一キログラムを給与することが望ましいわけです。（概略豚体重の一割）

また、濃厚飼料の節約の意味で給与する場合は成豚には七～八キログラムの給与が可能です。

(四)　放牧養豚について

牧草地に放牧養豚を行なう場合は、常に若い柔らかい草を与えるため、放牧地を数区に区分してつぎつぎと若草のある放牧区に放牧するようにします。青草量の不足の時は補助飼料を必要としますが、良好な放牧地では、六〇キログラムぐらいの豚なら補助飼料なしで発育いたしますので、生後五～六ヵ月目ぐらいまでは放牧だけで飼育できます。

放牧の要領は毎日四回の場合は午前四時と九時、午後三時と七時各々一時間ずつ放牧し、毎日二回の場合は、朝、夕の二回各々三時間ぐらいずつ放牧するのが良いでしょうが、夏季日照の強い日中の放牧はさけ、涼しい時に放牧するようにします。

なお、時間を区切ることは豚により徒らに草を蹂りんされるのを防ぎ、牧草の発育を助けるためにも極めて大切なことです。このような方法で、豚は毎日一五キログラムぐらいの青草を採食いたしますが、一〇アール当たりで三頭を四～五ヵ月間青草のみで飼育することができます。なお、放牧地にはラディノクローバーの単播は下葉がムレますので、ライグラス類との混播が望ましいわけです。

草のもつ特性を冬季間も有効に利用するためには、トレンチサイロなどを利用して、草サイレージを調整しておくことも必要でしょう。

（編集部調）